

---

**C o l d   S h a d o w ~ アキノウリノ   フユノソラ ~**

K I D

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Cold Shadow / アキノオワリノ フユノソラ

### 【Nコード】

N34400

### 【作者名】

KID

### 【あらすじ】

『楽しみだなあー。8年後の、お前のマジックが・・・』 そう言い残して、親父は死んだ。ある日突然、何の前触れもなしに・・・、約束も残したまま・・・。なあ、名探偵・・・。俺は・・・、誰にこの心<sup>ココロ</sup>を打ち明ければいい？\*俺はただのライバルで、好敵手・・・。だけど時々、そんな事なんて関係なしに、お前のその心傷(傷)を消したいと思う時がある・・・。なあ、キッド。俺は今のお前に・・・、一体何をしてやれる？ 盗一の誕生日にとある屋上でマジックを披露したキッドの心情を、暗めのシリアスで書きま

した。目線は一応快斗なので、快斗&コナンだと思います。ちなみにタイトルは、偶々話の内容と歌が合っていたので、GARNET CROWの『冷たい影』から。やたらめったら話が長いので、読む際にはご注意を……。

(前書き)

長いです・・・。途轍もなく長いです・・・。

『快斗。私に見せてくれないか？ 今のお前が出来る、最高のマジックを……』

何年前かに、俺の憧れていた人からそう言われた事がある。

いつも俺が、今の自分の実力<sup>マジック</sup>を見せるのは、その人の誕生日で……。

いつもいつも……。

俺は……、力不足だった……。

結構ダメなところとか、上手く出来ないところとかがあると、いつもその人はその欠点の直し方も含めて、俺のマジックを評価した。

『快斗。もう少し指を滑らかに動かしてごらん。その方が、タネをすぐに見破られ難くなる』

『無理だよ！ これ以上上手く動かないし……。……。やっぱり俺じゃあ、親父みたいにはなれねえよ……。』

『そんなことはない。上手く動かないのは多分……。お前がまだ小学生だからだ』

『小学生？』

確かに、子供の頃の指は『むくみ』とまでは言えないが、大人の指よりも太い。

そのせいなのか、指を動かすのも遅いし、しかも動き方がやや不格好。

まだ完全に成長し切っていない事もあるし、流石に小学生にプロ並みのマジックを教えるのには、まだまだ無理のある話だった。

『ねえ？ 親父も俺くらいの時って、マジックはあんまり出来なかった？』

『ん？ そうだなあ・・・今よりはうんと下手だったとも言えるし、未完成だったとも言える・・・まあ、私が世界に出られるほどの腕が持てたのは、高校2年になってからの話だったからな』

『えっ！？ 高2っ！？ 俺、まだ小3だよ！？ はあ・・・。なんか急に気が遠くなってきた・・・』

あと8年も先の未来の話・・・。

それくらい経たなければ、自分は親父を追い越す事も、プロになる事も出来ないんだ・・・。

それを思うと本当に気が遠くなってきて、俺は溜息を一つだけ吐くと、その場に力なく座り込んだ。

その姿を見て半分慌てたように、親父が俺に対して声を掛ける。

『なあに。高校2年なんてあつという間さ、快斗。お前には、マジックのプロになれる素質がある……。高校生になれるまでの間、ずっと腕を磨けばいいじゃないか。それに「8年」なんて月日、楽しい事が沢山続けば、いつの間にか過ぎていってしまうものだよ』

『そうかなあ。。。』

『そうさ。現に私だって、あまり意識もしていないのに、もうお前は小学3年生なのかと思うよ』

『。。。』

『だから快斗。。。前が高校生になったら、自分の中で一番最高だと思えるマジックを、私に見せてくれないか？』

あの時の親父の笑顔は、今でも忘れられなくて。。。

親父の誕生日にマジックを失敗した俺は、自分で『単純だな』と思いつつも、その言葉ですぐに軽くなれた気がした。

それと同時に、笑顔でこっちを見つめてくる親父に対して、俺は心の中で『8年後、絶対に超えてやる!!』と、逆に何かに向かって一気に走り出して行ったような感じもした。

まるで、自分の中にプロになるまでの大きな道があつて、その道の真ん中に、ポツンと一番近い目標である親父が立っているような。。。

そしてその親父に向かって、たった今俺自身が走り出したような・  
。。

そんな感覚を感じたのも、あの笑顔と一緒に覚えている。

俺はその後、無意識の内に小指を親父の目の前に突き出して、親父の  
小指と結んだ。

約束を破らない為の指きり……。

今になって思えば『何、幼稚な事やってんだよ』と思ったけど、俺  
にとっては……約束を破らない為の大切な事で……。

絶対に裏切らない為の、契約みたいなもので……。

どうしても、それをしないと気が済まなかったんだ。

『約束だよ、親父！絶対にその時には、親父を「あっ！」と驚か  
せるマジックやって、親父を一気に超えてやるから！』

『ほう……。ならば私は、お前の小さなミス一つ逃さずに、それ  
こそ厳しく評価させてもらっつよ』

『えっっ！酷っでえー……』

『ハハハ！なあに。私を超えられる自信があるのなら、そんな事、  
恐くも何ともないだろう？』

『えっ、いや……。でもプレッシャーが……』

『ん？アハハハッ！そうか！「プレッシャー」か！ハハハ  
！でも……。楽しみだなあ！。8年後の、お前のマジックが・

『普通なら「期待すんな」って言いたいところだけど・・・親父の場  
合は特別期待してよ?! まあ・・・、評価はちよっと軽めに・・・  
』  
『お? 「期待」については強気だなあー。ハハハ』

いつまでも笑い合っていたあの頃の記憶が・・・。

「か・・・・・・・・・・・・・・・・と・・・」

あしゅ・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・かいと・・・」

止まっていれば、よかったのに……。

「かいと……。快斗……。快斗！」

「うわっ!!……なんだ……。なんだ……。母さんが……」

「『なんだ』じゃないでしょ!? 一人でベッドで寝込んで……。あなた今日、仕事なんじゃないの?」

「えっ……。?……。!!! ヤッベっ!! 忘れてた!!」

一人で勝手に部屋で寝てしまっていた快斗は、母親の千影の言葉に慌ててベッドから飛び起きた。

そう言えば、今日はキッドの犯行予告日だった。

うっかり『昼寝』のつもりで寝てしまって、気が付けば時刻はもう既に7時を回り始めている。

あと2時間で犯行予告時刻だ。

「母さん、サンキュー! じゃあ、今日の夕食は適当に済ませるか  
ら! 行ってくる!!」

それだけ言い残して、快斗は全ての衣装道具類が入ったシルクハットを左手に持ち、玄関を勢いよく飛び出していった。

今日は木枯らしによる風が強過ぎるので、ハンググライダーのフライトは危険を伴う。

その為久しぶりに、今回は犯行現場にバスで向かう予定になっていた。

半分発車し掛けていたバスに、ほぼ駆け込み乗車で乗り込む。

これで終点まで行けば、今日の犯行予告舞台でもある美術館は目の前。

完全に夏から秋へと変わり出した冷たい風からは、やや冬の訪れですら感じさせられた。

そつとバスの車内温度と、外の冷たい気温の差で起こった結露だらけの車窓に、俺は傷一つない細い指を当て、見えない外の景色を見つめる。

(名探偵・・・、来てくれっかなあー・・・)

一応今日の予告状の事は、ニュースやら何やらで色々と取り上げられているし、あの美術館は、米花町から差ほど離れてはいない。

しかもご丁寧なまでに、俺は名探偵宛てに予告状すら送っておいた。その気になれば、いつでも来られる。

でも正直……。

どうしてあそこまでやったのかは、覚えていない……。

きっと名探偵<sup>アイツ</sup>がいないと貼り合いないからだろうとは思うが、最近無意識にそう行動を取っていることが多かった。

いつもいつも予告状をアイツに送っておけば、その日は必ずやってきてくれる。

その後は俺の対応次第で、宝石を返すだけで終わりにするか、どちらかが片方を追いかけられなくなるまで、スリル満点のチェイスを行うかが決まっていた。

ちなみに先週はチェイスの方だったのだから、今日は出来れば宝石を返すだけにしようか……。  
もっとも向こうが挑戦的だった場合は、その時に考え直してもいいだろう。

(もしかして、また特注品のメカでやってくんのかなあ……。  
最近本気で死にそうなメカが多いんだよなあ……)

そんな事を思いながら、しばしバスに揺られ続けること30分……。

時間通り、終点の『美術館前』という停車駅でバスを下りた俺は、人がまばらに通る街中をトボトボと歩いた。

流石は『木枯らし』と言うだけのことはあって、やや冷たい風が『ヒュー……』と道中に吹き荒れている。

そしてその風が吹く度に、自分の足元に落ちていた枯葉が一気に膝の辺りにまで舞い上がり、そして目の前を通り過ぎていくのだ……。

そんな光景を無意識に見つめながら、ふっと俺は先程の夢の事を思い出し、心の中だけで呟いた。

どうして行く前に、あんな夢など見てしまったのだろうか……。

理由は……、分かっていた……。

「今日、親父の誕生日だったんだよなあ……。なんでこんな大事な日に、キッドの仕事なんか入れたんだろう……。」

そんな思いが、脳内を果てしなく駆け巡る。

『キッド』として動く必要がなければ、ずっとあの夢を見ていられたのに……。

いつまでも夢の中で……。

今は何処にもいない、たった一人の親父と……。  
ずっと一緒に居られたのに……。

「って……、過去にいつまでもすがってたらダメなんだよなあ……。  
俺……、もう高2なんだし……。あれから8年も経ってんだし……。」

口には出さないけれど、きっと母さんだって、こっと思ってるに違いない……。

『いつまで捉われてるつもりなの?』と……。

「分かってるよ……。そんな事、一々言われなくなつて……。ちゃんと分かつてる……。」

自分に無理矢理そう言い聞かせるかのように呟くと、予告状を送つた美術館の方へと、俺は走つていった……。

犯行が終わつたのはそれから約4時間後の事で、時刻は既に午後1時半過ぎ。

もう開いている店屋もなければ、人の姿だつてほとんどない。

当然、行きの時のバスもないし、電車は終電が去つた後……。

夕飯を食べられる場所も今はなく、一人家にいる母さんも『もうとつくに寝ている』という話で……。

そんなこんなで『結局これからどうしようか』と、俺は一人考え込んでいた。

今は行きの時とは違って、白いシルクハットと白いマントを肩に掛けた、あの『月下の奇術師』という服装になっている。

勿論、右目のモノクルや、白い上下の服も忘れずに……。

そして今自分のいる場所は、ややあの美術館から離れたところに建

っているビルの屋上。

先程からしつこく追い掛けていた中森警部達は、もう既に何処かに行ってしまった……。

まあ……『上手く撒いた』と言ったところだろう。

ちなみにどうやってここにやってきたのかと言うと、なんの事はなく普通にエレベーターを使って上に上った。

ただし、あとで鍵が開いている事で怪しまれないように、扉の鍵はしっかりと外から閉めさせてもらった。

こうすることによって、このビルの警備員も、まさかここにキッドがいるとは気付かないだろうし、気付きもしない。

それに、もし名探偵がここにやってきたとしても、鍵を開ける音でこちらがすぐに気が付く。

まさに簡単な警報機のようなものだ。

それはさて置き……。

俺は胸ポケットから今日盗んだばかりの宝石を取り出し、それをまん丸の月に重なるように翳す。

透明な宝石からは月明かりによって、美しいまでの光が漏れた。

そしてその宝石の中心からは、綺麗な満月が歪んだ状態で映り込んでいる。

「結局今日もハズレかぁ……。親父の誕生日なんだから、せめて当たってほしかったのになぁ……。」

そう呟きながら、キッドとなった俺は器用に親指と人差し指の間だけで、今回盗んだばかりの宝石をクルクルと回し始めた。

今日盗んだ宝石は、大人の手の平にすら収まらないほどの巨大なダイヤモンド。

たった今月に翳してみたが、赤く光るものは何もなかった。

ふつと上の方を見上げてみれば、何処までも美しい星空が、それは月と匹敵するくらいにまで綺麗に瞬いている。

この時間ともなると、流星に明かりを点けている家やビルはほとんどないし、風も先ほどよりやや強く吹いている為、雲もほとんど流れてしまつて見当たらなかった。

「すつげえ星……。そう言えば……。死んだ人間は星になるんだよね……」

よく聞く言葉だが、以外にも実際にそう思つて信じている人は多い。

でも……。

そう思っている人達のほとんどは、実際に大切な人と『死』で引き裂かれるような思いをしたことのない人達ばかりで……。

むしろ、大切な人の死を味わつた人間は、一切そういうことは信じたくもないし、聞きたくもない……。

だって、そうだろ？

『そんな事信じたって、所詮会えないんだから』……。

「本当に死んだ人間が星になるんだったら……、俺はその星の方まで飛んでみてえよ……。ちゃんと面と向かって会えるまで……、行ってみてえよ……。」

どうしても会えないと分かって……。  
二度と会えないと分かり切って……。

そんな言葉……、信じて一体何になる？

「残された人の・・・、心がえぐられるだけさ・・・。そんなのだ単に・・・、少し気持ちを楽にさせようと思って、誰かが慰めで言っただけだろ？」

『死んだら星になれる』と・・・。

ふっと自分の脳裏に、再びあの夢の中で言っていた父の言葉が蘇ってきた。

『お前が高校生になったら、自分の中で一番最高だと思えるマジックを、私に見せてくれないか？』

「今日がその日・・・、なのか・・・」

そう呟きながら、俺は黙ったまま、再び何処までも広がる夜空を見上げる。

多少時間が経ったせいで、星の位置が若干変わった気もした。

そう思つて時計を見てみれば、深夜の12時まであと20分……。

「……………」

どうせいつも通りやってくるだろうと踏んでいた名探偵は未だにや  
つて来ないし、白馬は今ロンドン。

中森警部は、おそらくこちらを追いかけるのを諦めている頃だろう。

この場には……、これから俺が取ろうとしている行動を邪魔する  
者は、誰もいない……。

ならば……………。

「レディースLadies アンドand ジェントルメンGentlemen!! カイトKaito  
クロバKuroba イヌis マジックmagic ショーshow タイムtime!!」

空高くそう口を開き叫んだ俺は、お得意の手から真っ赤なバラを出  
すマジックと、そのバラを一瞬にしてハトに変えるマジックを披露  
し、秋の夜空へと羽ばたかせた。

さらに胸ポケットの方からも、数羽別のハト達を出現させたせいで、  
周りは一瞬にしてハトと白い羽まみれ……。

その姿はまるで、何処かのマジックショーで、前席の方に座っている観客達の目を、期待を沸かせているかのようだ。

そして同じくお得意の『おや？ どうやらまだ一匹・・・、紛れていたようです』と言って、シルクハットから七面鳥を出すマジックも行う。

『クエツ』という七面鳥の鳴き声と共に、俺の顔には満面の笑みが浮かんでいた。

だが・・・。

そのマジックを見てくれる人間は、ここには誰もいない・・・。

それは自分自身もよく分かり切っているし、何よりこれは、自分にとって一番尊敬していた・・・。  
大好きだった人に向けての、精一杯の誕生日プレゼントだ。

それを示そうと思っていたのが、俺の目はいつまでも、果てしなく広がる夜空に向いていた。

「それでは、お次はカードのマジックです。一見どこにでもありそうな未開封のランプですが・・・。Three・・・two・・・One！ あゝら、不思議！ カードの裏面に、あなたが今日身に

つけているモノクルのマークが付いてしまいましたー！ えっ？  
信用できない？ では、この内の一枚に名前を書いて、それをトランプの束の中に戻してください」

勿論人が居ないので、そのトランプを選ぶ役も、一人だけ名前を書く役も、そしてそれをトランプの束の中に戻すの役も、全て行ったのは俺自身だ。

それでも決して『笑顔』のポーカーフフェイスは剥がさず、まるで観客が居るかのように振る舞う。

「はい、書きましたね？ それでは、ちょっと指を鳴らしてみます」

パチンッ！

「はい！ あっという間に全部のトランプに、あなたのサインが写ってしまいましたー！！ タネ明かしは基本的に行いません。マジシャンのお決まりなので、ご了承ください……。さて、本日最後のマジックは、スピーディーなマジックです。よく目を凝らさなければ、タネが分かりませんよー？」

本当はタネ明かしなど求めてはいないが、観客にマジックを見せて驚かせるだけではない……。。

それだけだと、マジック自体が変わり栄えがしなく、すぐに観客が飽きてしまうのだ。

それを回避する為にも、こうしたちょっと場の空気が変わるような

コントやマジックも、プロには必要不可欠なのである。

ちなみにこのマジックは、8年前にちよつと指の動きを誤ったせいで、親父にすぐにネタがバレてしまった。

つまり、幼い時に一度失敗したマジックなのである。

その時の記憶が今もかなり鮮明に残っているということもあってなのか、快斗はあの日以来、このマジックを全くもってやろうとはしなかった。

でも今日は特別……。

待ち望んでいたたった一人の息子が、最初で最後の17になった年の、親父の誕生日。

今日は人生にたった一度しかない、リベンジの日なのだ。

俺はノリのいい音楽を頭の中だけで流し、まるでそれを聞いて合わせているかのようにテンポを取りながら、何も無い手から赤いバラを、紙吹雪を、トランプを……。

そしてそのトランプを、手で握り込むように見せて小さいスーパールに変えると、それを徐々に右手左手と交互に手渡ししながら、一回りずつ大きなボールに変えていく。

最後には、たった5センチくらいだったボールが、いつの間にか50センチほどにまで大きくなってしまっていた。

「さあ！ 私の最後のマジック、とくにご覧あれ！」

それと同時に俺が右手から出したものは、鋭く尖った針のようなもの……。

それを一気に、白い50センチほどの球体に突き刺した。

バーン！！

パンツ！ パンツ！ パンツ！

少し激しい閃光と大きな破裂音と共に、球体の中からは5羽ほどのハト。

それと一緒に紙吹雪やクラッカーのリボンなどが、屋上全体に散らばった。

これはファイナーレで見せる半分ドキドキのマジックで、よく父親がステージのアンコールラストで披露していたものである。

それを今『8年』という時間ときを超え、その息子が披露したのだ。

それもほぼノーミスで……。

俺は半分荒くなった呼吸を整えると、誰もいない屋上で華麗に一例をし、疲れを一切見せないようにポーカーフェイスを作る。

「本日のマジックはこれにて終了です……。またのご来店を、心よりお待ちしております」

ここまで出来て、初めて全ての段階のマジックが終わる。

俺はポーカーフェイスを一旦表情から拭い取ると、半分疲れた表情のまま、屋上の手摺に両手を乗せて、星空を見上げた。

また少しだけ……。星が動いている……。

「親父、どうだった？俺からの誕生日プレゼント！親父との約束、俺……。ちゃんと今日叶えたからなあーっ！自分の実力、全部出し切ったからなあーっ！」

俺の大声は一旦空高く響いたかと思うと、そのまますうーっと暗い夜空に吸い込まれていった。

辺りは信じられないくらい、とても静かである。

自分の声が、どこまでも大きく響く……。

「親父……。俺のマジック、見てくれただろ？ ……どう、……だった？」  
やや目線を下に向けながら、それでも声だけは、夜空に向かって問い掛けた。

二度とこの問い掛けの答えが返ってこないのは、もう自分でもよく分かってている……。  
分かり切っている……。

だけど……。

だけど……。

「なあ……、親父……。俺……、ちゃんと約束、果たしたんだぜ？……こんなに年月経ってんのに、俺……。忘れずに叶えたんだぜ……。何か……。何か言ってくれよ……」

本当に悲しいくらいに、周りは静かすぎた。

最初から答えなんて来るわけない……。それは分かり切っていたけれど、心のどこかで、それを否定する自分自身もいた。

だから余計に……。

余計にこの静けさが、自分の心をきつく、痛みを伴いながら締めつけた。

「……なあ……。何か言ってくれよ……。『お前、まだまだ子供だな』とか……。『このままじゃプロになれないぞ？』とか……。『学校はどうなんだ？』とか『皆と仲良くやってるのか？』とか……。関係ない事でもなんでもいいから……。！！……。何か……。何か言ってくれよ……。声くらい……。聞かせてくれよ……」

今日は親父の誕生日だから……。

人生最後の、高校2年生の年なんだから……。

約束、ちゃんと守ったんだから……。  
果たしたんだから……。

「親父……。なあ、頼むよ……。ここには、誰もいないんだぜ  
！？ 警部も名探偵も……。白馬や寺井ちゃんだっていない！  
誰も親父の声を聞いている人間はいないんだ！ だから……。だか  
ら今日くらい……。今日くらい……。さあ……。」

死んだら星になるだなんて……。絶対に嘘だ……。

これだけ残された人が、必死に呼んでいるというのに……。  
叫んでいるというのに……。  
望んでいるというのに……。

空に広がる星は、何処までも遠くて……。  
自分の体に吹いている風は、途轍もなく冷たくて……。

「親父……。俺、親父のこと……、ずっと大好きだった……。  
居なくなつてほしくなんか……、死んでほしくなかつた……。  
・！ いつまでもこうして互いにマジックの良し悪し言い合つて……  
・、一緒に笑つていたかつた……。俺がプロになれば……  
・、いつか……。いつか俺のショーを見せたかつた  
！ 連れていきかけた！ なのに……。……それなの  
に……！」

その瞬間、俺はその場に崩れるようにしやがみ込み、安全用のフェ  
ンスを背もたれ代わりにして、まるで体育座りのような体制になつ  
て泣いた。

そして泣いたまま、膝の上に互い違いで乗せた両腕の中に、無理矢  
理自分の顔を押し当てる。

モノクルが鼻の近くの骨に当たつて、一瞬だけ痛みを伴つた。  
でもそんなものは本当に一瞬だし、どうにでもなる。

俺は静かにモノクルを右目から外すと、自分のズボンのポケットへ  
と仕舞い込んで、そのまま頬を伝う涙の間隔を感じ続けた。

そして顔を再び膝と腕の間に強く顔を押し当てて、堪え切れずに零  
れ落ちそうになつた感情を、今度は必死に堪えようとすする。

今はまだ・・・、キッドのショーの最中・・・。  
偶々名探偵が、ここに来ていないだけなんだ・・・。  
だからポーカークフェイスだけは、守り抜かなくてはならない・・・。

たとえ・・・、・・・どんな事があっても・・・。

「うっ・・・ぐっ!! う・・・」

だけど・・・。

だけど・・・。

『楽しみだなあー。8年後の、お前のマジックが……』

「ッ……、お……や……じ……」

楽しかった、幸せだった頃の記憶が、一気に流れ込んで消えていく……。

まるで何の前触れもなく出来た、水面の泡のように……。

この時の俺自身には、自分の身の周りの何物よりもずっと……、ずっと恐かったものがある。

それは……、日に日にあやふやになって、そして消えていく過去の記憶だ。

人間は昔の記憶などといった『過去の出来事』は、日々新しく覚え込まなくてはいけないモノの代わりに消していく。普通の人なら『あの頃の話は、もうほとんど忘れてしまった』と思う程度だろうが、快斗は違った。

『過去の記憶が消えていく』ということは、大切な親父ひととの楽しかった思い出も、日々も、その人の優しさも、その全てがどんどん消えていくということ……。

現に今現在、親父との思い出の日々の中で『あれ？ あの時どうなったんだっけ？』と忘れてしまうことが、自分の中で多くなっている事には気が付いていた。

そしてその度に……、自分が恐いと感じた……。

その内自分が『親父と一緒に遊んだこと』『親父にマジックを誉められたこと』、そして仕舞には『親父の声』も忘れてしまうのかと思うと、恐くて恐くて堪らなかった……。

自分は忘れたくないのに……。  
消えてほしくないのに……。

。徐々に親父の存在は・・・、自分の記憶の中からも消えていく・・・。

物音すら立てず、何の前触れもなしに・・・。  
少しずつ、消していく・・・。

親父を焼き払い吹き飛ばした、あの紅蓮の炎のように・・・!!

「ヤダ・・・。・・・ヤダ・・・ヤダ・・・ヤダ！ ヤダ！！ ヤ  
ダッ！！」

『楽しみだなあー。8年後の、お前のマジックが・・・』

「うっ……！ うああああー……！！ ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……なっ……なんでだよっ……親父……やくそく……、したのにつ……！！ 『絶対見せる』って……約束したのにつ……！！ なのになんで……、なんで……、なんで死んじゃうんだよーっ！！」

いつも最後に思い出すのは……、霊安室で見た、親父の亡骸……。  
白い布が被せられているのに、その布の皺の形から見えるのは、どう考えても小さ過ぎる身体で……。

俺がいつも見ていた親父よりも、明らかに細くて……。  
その布を取ろうとしたら、母さんに止められた。

『快斗の見る姿じゃない』と言って……。

「うっ……！！ ……ハアッ……く……」

分かってた……。

親父はあの事故で全部燃えてしまって、ほとんど骨だけになっていたのを……。

身体の一部が何か所も、爆発でなくなっていたのも……。

『親父……、死んでるの……？』

「ぐっ……、うっ……！………っ……」

俺はその布に手を当てて、あまりにもゴツゴツし過ぎている親父の身体に違和感を感じながら、ずっと揺すって泣き叫んだ……。

『嫌だよ……嫌だよ……嫌だよ！嫌だよ！！嫌だよっ！！  
逝かないでよ、親父ーっ！！親父ーっ！！』

後ろで母さんや寺井ちゃんに止められながらも、俺はずっと……、

ずっと……。

「はっ……はっ……っ……」

『親父！！ お願いだよ……！ 俺……！ 「高校生になつたら、絶対に親父にマジック見せる」って、約束したじゃないか！！  
「楽しみだ」って……、そう……、そう言ってくれてたじゃないか！！』

そう叫びながら体を揺らしていたら、たった小学生の……。  
子供の力だと言うのに……。

掴んでいた布の感触から、親父の身体がどんどん崩れていくのが分かって……。  
まるで土の塊を触っているように、簡単に骨が砕けていくのが分かって……。

「……ハツ……！ あっ……ああ………嘘だ……嘘だ……！  
だ……！ 嘘だ！ 嘘だ！！ 嘘だっ！！ 親父、お願い！ 逝  
かないで……！！ 俺を置いて逝かないで！！」

「……お……俺を………置いて………逝かないで………  
……親父……置いて………逝かないで………っ……傍にいてよ  
！！……親父！ 親父いーっ！！ くっ………うああああー  
っ！！」

気付けば俺はただひたすら、その場に大きく倒れるような体勢にな  
りながら、大粒の涙を流して泣き続けていた。  
まるで……、親父の遺体を見たあの時の、辛い過去に戻ってしま  
ったかのように……。

親父が死んだあの日、人生で涙を流すのは、これが最後だと思っ  
ていた。

いつも周りに心配を掛けたくなくて……。

誰かにすがったところで、どうしようもないと分かってて……。

だから人前では泣けなかった……。

特に……。

親父の事に関しては……。

俺はさらに強く瞼を閉じると、荒々しくなった息を吸いながら、途切れ途切れに『親父』と叫んで泣き続けた。

それも、その声押し殺すのはかなり難しく……。

本当に小さな子供が泣くかのように、掠れた声を幾度も漏らしながら、俺は時が経つことすらも忘れて、ただひたすらと……。

ひたすらと、心に詰め込み過ぎていたものを流し出した。

と、その時だ。

ガバツ！

「！！！」

一瞬……、何が起こったのか分からなかった……。

ただ唯一分かった事は、誰かがこの屋上に飛び込んできて、今、蹲  
つて泣き叫んでいた俺を、横から急に抱き締めてくれたこと……。  
それも、しゃがんだ俺の身体をようやく抱き締められるくらいの体  
しかない人間……。

そんな人間……、頭に浮かぶ人物は一人しかいない……。

「……捕まえ……、ないのか……？……」

嗚咽のせいで声は震え、ほとんど何を言っているのかは分かり難かったのだが、相手は何を言っているのか理解したらしく、小さく答えた。

「捕まえてほしいのか・・・?」

逆に質問で返されて困ったけれど、俺はとりあえず、力なく首を横に振った。

その反応に、名探偵であるはずの名探偵の右腕が、<sup>ライバル</sup>優しげに背中を摩り始める。

それと同時に、名探偵はさらに強く、俺の体を抱き締めた。

「名探偵……。いつからここに……?」

「最後のマジックを、やってた時だよ……」

「……。じゃあ……。全部聞いていたんでしよう……」

「!」

そう言ったのと同時に、コナンの手が一瞬だけ止まった。

その反応を見て、俺自身は『やっぱり……』と思う……。

「……。心配すんな……。聞かなかつた事にするからさ……」

「それって……、気休めですか？」

「似たようなものかもな……」

『そうとしか言えないだろ』と思いつつも、俺はただされるがままにされていた。

首の下と背中に触れている名探偵の腕が、この気温の中だと言うのに、心地いいくらいに暖かい……。

きっと彼は、ここにやってくるまでの間にかなり辺りを走り周り続けていて、逆に自分の方は、この気温の中で体を冷やし過ぎていた為だろう。

俺はその腕に顔を一瞬だけ埋めたが、すぐにそこから顔を反らし、ぐっと目元に力を入れ、涙を止めようとした。

人前では泣けない……。

いつも誰かを心配させていたから……。  
不安にさせてしまっていたから……。

だから決めたんだ。

『絶対に人前では泣かない』と……。  
これ以上誰かを、不安にさせないと……。

俺は中々消えてくれない涙に苛立ちを覚えながら、声までもを押し殺す。

すると何故か、ずっと背中をゆっくり撫でていたはずの名探偵の腕が、先ほどよりもさらに強く、俺の体を抱きしめた。  
一気にお互いの体温の距離が縮まる。

そして上の方からは、これが本当に名探偵のものなのかと疑うくらい、大きな怒鳴り声が響いた。

「堪えるなっ！！」

その声に驚いた俺は、名探偵の方を振り向く事は出来なかったものの、ただただ目を大きく見開いた。

その瞬間、解放されたかのように俺の瞳から、涙が再び一気に流れ

出す。

さらに名探偵は、抱きしめていた腕を俺の両肩に乗せ、半分呆れたような……。

怒りに満ちたような目で、俺の顔を睨んだ。

「バーロオーツ！！ お前まだ気付かねえのか！？」

「……えっ……？」

「今の自分の心がっ……！ どれだけ背負い切れねえものを背負ったままなのか…… まだお前自身で気付かねえのかよっ！？ まだこれ以上……、こんな想い抱え込むつもりなのかよっ！！」

「名……探偵……？」

「どうせ『周りに心配かけるから』『不安にさせるから』……。それで今まで自分の本当の感情押し殺してたことくらい……。普段のお前を見たら一発で分かるんだよ！！ でもそれは……。お前自身が勝手に決め付けた事だろ？ 本当に周りの事なんて、聞いたりしたわけじゃなくて……。自分で勝手に決め付けて押し込んでただけだろっ！？ そうだろ！？ キッド！！」

それを聞いて、俺自身も『ハッ！』とする。

名探偵の……。言う通りだった……。

自分はいつも、あの時泣いていた母さんや寺井ちゃんの事を見て、勝手に決め付けてた……。

ここで自分が泣いたら……、きっとあの人達も、あの時の悲しい出来事を思い出さしてしまう……。

また、傷つけてしまう……。

そんな恐怖心があったから、言えなかった……。  
泣けなかった……。

もう誰かを不安にさせるのなんて……。  
もう……、懲り懲りで……。

それで……、それで……。

「そうだろ？ キッド……それでずっと……、こんな想いを一人で、たった一人で抱え込んでたんだろ？」  
「……っ……っ！」

俺は泣きはらしながら、名探偵の問いに小さく頷いた。

自分でそう認めて、初めて『馬鹿だなあ』と感じた……。こんな事したって……。あの二人には逆効果だったと言うのに……。

今の今まで……。それに気付かなかつたなんて……。

「馬鹿だよな……。名探偵……」

「……………えっ……………?」

「……………堪えてたつてさあ……。余計に……。心配させてただけなのに……………勝手に周りと自分を……。苦しめてただけなのに……………ッ!……………」

そう口にするのが、今は精一杯……。

嗚咽のせいで息が苦しい。

何も話せなくなつて蹲つた俺を、名探偵は再び強く抱き締める。優しく背中を撫で直す名探偵の手に、俺はこれ以上堪える事が出来

なかった。

全て吐き捨てるかのように、ただ声を上げながら泣く。

それと一緒に、ずっと辛かった、痛かった、苦しかった胸の内を。  
俺は名探偵の腕の中で、必死になって叫んだ。

ただ誰かに聞いてほしくて・・・、それで嗚咽をどうにか押さえながら、そのまま叫び続けた。

「俺・・・、周りの人間がみんな・・・俺のこと心配するから・・・！ いつも・・・何かあったのか？」とか「大丈夫？」とかかって訊かれると・・・！！・・・本当に何も・・・、言い出せなくなつて・・・。それで皆に本当のこと隠し続けてたら・・・。うつ・・・くツ・・・！！・・・いつの間にか・・・このことを打ち明けられる人間が、誰一人いなくて・・・！！  
！ そつ・・・それで・・・！ それで・・・自分で一体どうすればいいのか・・・。何もかも・・・、全部分からなくなつてつ・・・！！・・・つ・・・」  
「・・・周りに優しくなり過ぎたんだよ・・・、お前は・・・。周りの事を考え過ぎたせいで、お前は泣ける場所を見失ったんだ・・・」  
「・・・」  
「？ つつ・・・はっ・・・」

やや息苦しさまで感じてくる嗚咽の震えを宥めるかのように、名探偵がゆっくりと背中を撫でる。

それに合わせて呼吸をしてみれば、少しではあるが落ち着いてきた。

「周りの人間は皆、たとえ心配し過ぎていたとしても・・・、所詮はお前の事を想って、そう訊いてきてたんだ・・・。だから本当なら、自分が辛くなった時にすぐにその誰かに打ち明けていれば、今日の出来事は全て起こらずに済んだのかもしれない・・・。・・・。だけどお前には・・・。お人好し過ぎるお前には・・・、その周りのちよつとした気遣いが、却って逆効果になつちまってたんだろくな・・・。」

「・・・。めい・・・、たん・・・て・・・っ」  
「でも、それでも全部を抱え込んだままじゃあ・・・！ いつまで経つてもお前のその傷は消えない！ それは・・・、お前自身が一番よく分かっているはずだ！！ だから今・・・俺はお前に怒鳴つたんだよ・・・。今全部を打ち明けなくて、一体今度はいつ・・・。・・・。・・・。一体いつ何処で、その事を誰に打ち明けるつもりだった！？」

そう問われて・・・、答えが見つからなくて・・・。  
俺は力なく、下唇を噛みしめた。

数名は怪盗である自分を嫌い・・・。  
数名は怪盗である自分を心配する・・・。

誰も『俺自身の事で傷つけない！』と思えば、自分だ

けが光のない闇の中に立たされていて……。

ソコニハ、誰モイナクテ……。

「いないんだろ？ ……今のお前が、本当の気持ちを打ち明けられ人間ひとは……、誰もお前の傍には……、いなかっただら……？」

全部……。

この探偵君は、お見通しだったんだ……。

俺は自分の首下に回されている小さな腕を、自分の左手でぎこちなく掴んだ。

涙はいつの間にかコンクリートではなく、名探偵の腕の方に落ちていて、そしてそれが一気に、名探偵の青い袖の中に、次から次へと吸い込まれていく……。

「まったく……、こんなに体冷やしやがって……」

あまりにも冷た過ぎる体に少々呆れながらも、コナンは丁度キツドの死角になっっている事をいい事に、優しげな笑みを浮かべていた。

いつもなら、絶対にコイツをこんな顔では見ない……。

せいぜいあったとしても、いつものようにゲームを楽しむ時の、あの好敵手ライバルとしての笑みくらいだろう。

ふっとコナンは、この抱きしめている怪盗が先程まで言っていた言葉  
葉を思い返した。

一番多く出てきた『親父』と『約束』という言葉……。  
それに『死んでほしくなかった』という、悲しい声……。

きつとキツドの父親は、つい最近、またはうんつと昔に死んでいる  
のだろう。

それに引き換え、こちらはずっと両親が海外に暮らしていたとはい  
え、連絡一つで会いたい時はいつでも会える。  
勿論父親も……。

だから完全に、キッドが抱え込んでいた悲しみがどれほどのものなのか。

こっちはそれを全て把握することは出来ない……。

それでも、ただ両親と離れて暮らし始めた中3の時の記憶を思い起こしてみると、それなりに自分の周りの空間が寂しくないとは、一度も思わなかった事はなかったと思う……。

少なくともここに『孤独感』と言うべきものはあった……。

それでも自分の場合は、両親が帰ってくる度にその感覚は消えてい……。

でもコイツの場合は、それをある日突然消し去れなくなってしま……。

ずっとこのまま……。

そんな思いを無理矢理、心の奥底に押し込ませて……。

誰の傍でも……、泣くことすら出来なくて……。

(キッド……。辛かったはずなのに、よく頑張ったな……)

もう堪えなくていいから……。  
耐えなくていいから……。

今はただ……、泣いてればいい……。  
楽になれば……、それでいい……。

容赦なく吹きつさぶ木枯らしに、これ以上快斗の体を冷やさぬよう、  
コナンは風になびく白いマントを掴み、それも一緒に抱き締めた。

フライト用の薄い生地だが、多少の毛布代わりにはなる。

「これ以上は何も言わねえから……。お前が泣き止むまで、ここにいてやるよ……。」

その声に答える事もなく、俺はただ、名探偵の腕の中に顔を埋める。

まだ完全に泣き止んだわけではないが、何故か涙と一緒に、微量の睡魔が襲ってきた。

勿論、コナンが麻酔針を打ち込んだわけではない。

今のこの時間とこの気温……。

それに、ついさっきまで体力を使い過ぎていた行動……。

その全部が、昼寝をしたにも関わらず降り掛かって来ていたのだ。

今この場で寝てしまったら、当然名探偵に迷惑を掛ける事になる。そうだと自分で分かっているとしても、もう既に、体のほとんどは動かなくなっていた。

(また……。……夢あぐらで親父に……。会えるかな……。)

そう思ったのを最後に、快斗は静かに、意識を手放した……。

(後書き)

ども

お決まりの新連載前の短編を載つけた

KIDです!!

なんか過去にも似たような事を書いた記憶が・・・(苦笑)

コナンってか、前回『GARNET CROWの曲からは書かない』って、言ってたじゃねえか!? 何約束破ってんだよ(怒)!

KID

違うってば!

今回実は小説を先に書いて、それでタイトルどうしようかなあ〜って思ってたさあ・・・。

(何せ、いつもタイトル決まんない内は、保存する時に『あ』とか『い』とか『う』とかにしているから・・・(笑))

それでギリギリまで迷って『どうしよう』って思ってたら、ふっと読み直してる時に『冷たい影』の歌詞が過って、歌詞カード見てみたらめっちゃくちや合ってたから・・・。

それでタイトルを英語にして、ついでに付け足して載せた・・・。

コナン

「ふうん」

K I D

えつと〜・・・。

今度の新連載は、あのフジテレビの番組と合わせてみようかなと・・・。

（何かと合わせるのは、最初の『リセット』以来だなあ〜）

その他にも色々な奴をちよこつと・・・。

コナン

「えっ？ はい？」

K I D

それでは ミ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3440o/>

---

C o l d   S h a d o w ~ アキノオワリノ   フユノソラ ~

2011年1月26日13時01分発行